

左から東10番・9番・1番 (AFLO / Aoki Koji氏撮影・霞ヶ関CC提供)



その 228

クローズアップ21

東京2020五輪・ゴルフ競技開催の
霞ヶ関CC

デジタルミュージアムに収めた歴史と五輪を迎えて



今回は東京2020オリンピックの開催を控え、デジタルミュージアムを制作した霞ヶ関カンツリ倶楽部(36日、埼玉県)のメンバーに、倶楽部の歴史と逸話、五輪を控えての心境などを伺った。同倶楽部は、歴史と伝統の関東7倶楽部の1つで、国内でも雄大なコースと36ホールの規模を備え、過去にカナダカップや日本オープン制作スタッフの集合写真。後方左からパーカー・シムズさん、沼澤忍さん、越正夫広報委員長、土肥泰彦さん、市川卓広さん、赤木丈夫さん、前方左から業務管理部清水優総務担当部長、業務管理部広報担当安戸亜子さん

ンなどビッグトーナメントを開催した特別な存在だ。

国内で初めて倶楽部会報を発行し、グッドフェローシップを促進するフェローシップ委員会を組織した。またアリソン氏や井上誠一氏など国内のゴルフ場に多大な影響を与えた設計家と深い関わりがある。

日本のゴルフコースの姿と倶楽部ライフに影響を与えた倶楽部の1つである「霞」(メンバーは親しみと敬意を込めてそう呼ぶ)が、五輪をどう迎えるのか。本誌22頁23ページのミュージアムを併せてご覧頂きたい。

90周年記念でデジタルミュージアムを制作

デジタルミュージアムの開設に携わったメンバーは「歴史資料チーム」と名付けられ、広報委員会から越正夫委員長(倶楽部理事)が参加。同委員会は普段、会報の制作と対外的な広報を担い12名で構成されるが、広報委員以外でミュージアムに興味を持つ人に集まってもらい、新たに歴史資料チームを結成して、メンバー5名と事務局の2名が制作に加わった。

霞ヶ関CCの歴史 HPや年史から抜粋

・1929 (S4) 東コース建設	埼玉県入間郡霞ヶ関村（現・川越市）笠幡の旧家の当主・發智庄平氏所有の広大な土地がゴルフ場に最適と判断した藤田欽哉、赤星四郎氏らの尽力で1929 (S4) 年2月工事開始。5月倶楽部創立総会。起工から8ヶ月後の9月末、18万坪の土地に6,600Yパー72の東コース竣工。倶楽部の開場式は同年10月6日。当初の会員数は310名であった。
・1932 (S7) ～アリソン氏による改造。36H誕生	1930 (S5) 年12月、世界的名設計者C.H.アリソン氏がコースを視察し同氏の改造提案書により、助手ベングレース氏の監督のもとに東コース改造。有名なアリソンバンカーが東10番等に作られた。さらに第2コース建設の要望が高まり、1932 (S7) 年6月12日に西コース（設計藤田欽哉）が開場。これにより日本初の36Hゴルフ場となった。 1934 (S9) 年には会員数も1,000名を越え、会員はプレーと倶楽部ライフを大いに楽しむことができたという。
・1938 (S13) ～戦時の接収、戦後の復旧	1938 (S13) 年のゴルフ入場税の導入、1940 (S15) 年のJGAによるゴルフ自粛要請など戦時色が濃くなる。第2次大戦突入してまずキャディが廃止、1945 (S20) 年4月倶楽部が業務停止となり同年8月終戦、9月米軍によって倶楽部は接収され、1952 (S27) 年3月まで続いた。戦時中の開墾その他で荒れ果てたコースは、米軍接収中も復旧へ向けた作業が行われ、1952 (S27) 年9月にはまず東コースの復旧工事が完成。続いて西コースの復旧が後年の名設計家井上誠一氏の設計管理のもとに行われ、1954 (S29) 年6月に念願の36Hが復旧した。
・1957 (S32) ～カナダカップの開催～	復興でS29年に初めて来場者数が5万2千人を数える（戦前は2万人以下だった）。 1957 (S32) 年10月24日から4日間 日本のゴルフ史の中でも特筆すべき出来事の第5回カナダカップ（現在のワールドカップ）大会が東コースで行われた。30ヶ国、60名が参加。この大会で日本チーム（中村寅吉・小野光一プロ）が団体優勝、個人でも中村プロが優勝した。その模様はテレビで全国に放映され、日本のゴルフ熱は一気に高まり、霞ヶ関カンツリー倶楽部も一躍世界に名を知られるところとなった。
・1995 (H7) ～日本オープン等	日本オープン1995、2006、日本女子オープン1999 アジアアマチュア選手権2010～ 1998年 (H10) 年 西コース1グリーン化（設計：川田太三氏） 1999 (H11) 年6月、当倶楽部初の女子オープン競技・第32回日本女子オープンが東コースで行われた。 2006 (H18) 年10月には第71回日本オープンゴルフ選手権が西コースで開催 1933 (S8) 年の第7回大会東コース、1956 (S31) 年の第21回大会西コース、また1995 (H7) 年の第60回大会東コースに続き11年ぶり4回目、西コースでは第21回大会以来、半世紀ぶりの開催となった。 2010 (H22) 年10月、第2回アジアアマチュア選手権が西コースにて開かれ、全世界約130の国と地域にライブ放映された。日本の松山英樹選手が外国選手を抑えて見事優勝。松山選手は世界に躍進するきっかけとなった。
・未来への伝承	2020年東京オリンピックのゴルフ競技が霞ヶ関カンツリー倶楽部東コースで開催することが決定。2016年 (H28) に第一級的设计家であるトム・ファジオ氏と子息のローガン・ファジオ氏の設計により、東コースの全面的な改造（1グリーン化）を実施。

チーム構成員について越委員長（以下注釈ない限り、越委員長の説明）は「土肥さんは元広報委員の先輩で、以前から歴史資料の公開に熱意をお持ちでした。市川さんは倶楽部の総務委員でコンピュータシステムに詳しくネット基盤は彼に担当してもらいました。沼澤さんは広告業界のクリエイターをされていて映像制作はお手の物。お爺さんは昔、霞の広報委員長をされていて、その血を引いたせいでしようか、熱心に取り組んでくれました。パーカーさんは落語が趣味など日英の両言語に精通していて、ネイティブスピーカーでもあり、英語のナレーションを担当してもらい、また海外向けの



日本で初めて1930年に発行された倶楽部会報「Fairway」

のページの見せ方も相談させてもらいました。赤木さんは井上誠一さんのご親戚でコース関係資料は赤木さんに担当してもらいました」と紹介している。
デジタルの由来については「2019年で90周年を迎えるのでミュージアムは記念事業として取り組みました。紙の年史は75年史があり、次は100年と考えていて、今回はデジタルにしよう。オリンピックの前後に霞ヶ関のHPの閲覧数が増えると思うので、その時にいいコンテンツを作っておきたいと思ったことが理由の一つです。それと、我々が持っている歴史資料は動画、写真が圧倒的に多いので、それをお見せするのはネット上が一番いいだろうという着想です。
昨年の11月くらいから作業を始



めたので丸1年がかり。1929年10月開場なので、開場と同じ10月までのミュージアム完成を目標にしましたが、何とか間に合いました」と語る。

メンバー向けは倶楽部の会報と年史がすべてデジタル化

デジタルミュージアムはデジタル用とメンバー用、英語版がある。デジタル用は本誌22×23ページで紹介したように誰でも内容が見られる。メンバー用はこれまで発刊の会報「Fairway」全冊や年史全冊のアーカイブ(書庫)から本文記事を検索できる。名前で検索すると寄稿者の全リストが出てくるシステムで、目次でも検索できる。実は、会報「Fairway」は日本最古の会報であり、通

巻発行数は2020年3月で800号を数えるという。創刊当時は海外経験が豊富な創立メンバーや商社マン、新聞記者がゴルフに関するルールやマナー、メンバー達が仲良くするフェローシップ精神が多く書かれたという。

ムービーの裏話を尋ねると、「フアジオさんのコース解説のムービーは、3年前に一度撮りましたが、今年コース映像を撮り直しました。3年前の改造で芝をすべて剥がして土を動かしましたので、改造後3年たって芝が安定してきて、今年撮った映像ではコースの印象が変わりました。

また、オリンピック用のドライビングレンジに関しては、350ヤードの距離で自然芝から打てるようにという要望がIGFからあったため、西コース18番のフェアウェイにオリンピック用の仮設ドライビングレンジを昨年造成してプレー禁止区域にして、西18番には仮設グリーンを作って通常より短いホールとして営業しています。現在使用している250ヤードのドライビングレンジにはオリンピック期間中はテレビの放映施設が設置されると聞いています」と説

明している。

プレー観戦のお勧めスポットは「10番と18番は両方とも池のあるホールで人気になるでしょう。個人的には9番のグリーン手前のバンカーが深く、パー4で距離も521ヤードあるので興味深いです。グリーンのアレンジレーションがきついのは14番。コースの中で一番遠いので大変ですがね。今までの開催トーナメントで経験したことのないくらい多くのギャラリーが入ると、お目当ての選手について回るのは容易でないかも知れません。350ヤードある練習場で観戦するのもお勧めです。17番は300ヤード強の短いパー4ですがグリーン周りが難しい。いずれにしてもスコアが動きやすいホールでもあるので最終日の17、18番は見ものになりますね。

東コースは7000ヤード弱だったのが、7466ヤードと距離が伸びました。パーは71。グリーンは2グリーンから1グリーンにしました。あとはフェアウェイとグリーンのうちねりを凄く大きくしました。フェアウェイの傾斜が大きくなって、フェアウェイに打ったはずの球がラフに行くのが相当



「皆さん、一芸に秀でた方が集まった」
(越委員長)

多い感じですよ。それが今回の設計の特徴です。フェアウェイは広いが、狙えるところは限られている。またIGF（国際ゴルフ連盟）からの指示にもとづいて、オリンピック用にフェアウェイの幅を狭めはじめています。またグリーンもほとんどが2段か、3段あります」と説明している。

赤木さんからは「新グリーンは1グリーン化で600×800平方メートルの面積となり6×8カ

所にピンが切れるようになっていきます」と補足し、「バンカーの数は減ったのですが、1つ1つの面積が大きくなったので総面積はあまり変わっていません。深さも改造前と同じように深いバンカーが多く、特に8番と9番は深いですね。10番はグリーン面が少し低くなり、ティーからグリーン面が見えるようになりました」と話している。

越委員長は「ミュージアムの目玉として、取り上げたいのは古いお宝映像ですね。昭和4年と8年の動画がありまして、当時16ミリフィルムで撮っていた。15年位前に当時の広報委員会がデジタル化していたお陰で良い画質で見られるようになりました。倶楽部に元々保存してあったのをお披露目できることになったんですね。」

広報委員の先輩の土肥さんは、「廣野のゴルフミュージアムを見て、霞も歴史を残して置きたいと思いました。ただ歴史資料を入れる建物を作るのは難しいという理由で進めることができなかったのですが、デジタルミュージアムという新しい発想を得て実現することができました」というもので、その熱意が今回のミュージアム作



アリソン氏と井上誠一氏の物語

りの原動力になったという。

越委員長は「ミュージアムの中で個人的に思い入れがあるのが、コースの変遷の航空写真でして、今のサイボクさんの敷地にあった戦前の西コースが、戦時中から食糧増産のために農地になっていて、当時は18ホールしかプレーできませんでした。」

また、その「コースの変遷」の中に井上誠一さんとアリソンさんの読み物を用意しました。それも霞ならではのと思うので、各ホール細かい指示を出しているアリソンさんの提案書全文を載せました。

井上さんも戦前から霞のメンバーだったので、会報にも文章を寄稿されています。こちらも霞ならではの井上誠一ストーリーですね。メンバーなのですが、保全部長という、今でいうグリーンキーパー

の仕事をしていたことも紹介しています」と興味深いお話を披露した。

井上誠一氏と霞の知られざるエピソード

ミュージアムの中でも井上氏の詳細な設計図と緻密で几帳面なエピソードを読むことができる。

赤木さんは「井上さんの原点は霞なんですね。是非見ていただきたい」と話している。

そこで霞の資料を読むと、井上氏は霞のメンバーの叔父の勧めで成蹊高校の学生時代に来日中のアリソンの通訳を買って出て、川奈や霞で改造・設計現場を経験。その後、霞に入会して英語文献から芝の管理も勉強し、メンバーでありながら20代後半で保全部長（今のコース管理部長）として天候や病虫害に悩まされていた記事を会報に寄稿。戦前は霞の西コースの13番グリーン横に家を構えて、霞の常駐会員となりながら、他のコースの設計も手掛けた。戦後は霞のコース復旧にも尽力、25年史で創始者の一人の藤田欽哉氏も井上氏に感謝の言葉を残している。その後霞の新西コースや、国内各地



海外のメディアも魅了する“赤松と芝と水”

に日本を代表するコースを設計し、日本で初めてコース設計を職業としたのも霞が原点であった。

越委員長も「東の井上さん、西の上田さん。2人ともアリソンの薫陶を受け、上田さんは廣野で、井上さんは霞でというあたりは日本のゴルフ場設計の源流として興味を惹かれるストーリーであると感じました。アリソンが残した日本への功績は大きいでしょうね」と語る。アリソンが設計したコースは今や世界的にも現存するコースが少なく、霞も廣野や川奈・富士、鳴尾、茨木CC東とともに貴

重な存在だ。

「昔、東コースはレイアウトだけ藤田さんが決めてあとの設計は赤星四郎さんなど5人で分担して現場で造成を指示したという。そこにアリソンさんが改造の指示を与えて、代表的なコースに仕上がった。また井上さんは初めて日本で図面を作ったらしいですね。すごく精密な図面が残っています。」

それと霞は戦前からフラットなコースで知られていましたが、今よりも樹木が少なく、特に東コースは木が少なく、開業後にかなり植樹をしたと聞いています。戦前のコース写真を見ると内陸のリンクスのような印象を受けますね。カナダカップ当時でも、今と比べると樹木が少ないです。

先日、海外のメディアが取材にこられた時「赤松と芝と水」のコントラストは海外のコースでは見られない美しい景観ですと、すごく景色を褒めてくれます。それと歴史のお話をするとうごく喜んでくれます。リオと違ってストーリーがあって安心できると。日本のゴルフには歴史もあって、トーナメントの実績もあると評価してくれます。

我々の中でカナダカップは大きな出来事でした。日本中に放映されて、日本でゴルフブームが起った。IGFはオリンピックのゴルフ競技をきっかけに世界のゴルフの普及を一層進めたいと発言しています。我々も、競技会場を提供する立場で、カナダカップの時のようなゴルフ界への貢献ができればと思っています。

霞のコースで世界のトッププレーヤーがメダルを目指してプレーし、その様子が世界中に放映されることは大変名誉なことですので、われわれの役割であるコース整備に、IGFと密接に連携しながら、出来るだけの努力を行っていくつもりです。

オリンピック開催を引き受けたことで、一定期間のコースの閉鎖など倶楽部とメンバーにかかる負担も少なからずありますが、ゴルフ界のために貢献するという理念のもとでメンバーの理解を得て準備を進めています。

霞は公益委員会という組織を持ち、周辺地方自治体のゴルフ大会への会場提供、川越市の福祉施設の方たちのコースへの招待などの公益活動に従来から熱心に取り組

んでいます。そのような日常的な公益活動の目線からも、オリンピックへの協力は霞では違和感なく受け入れられています」と説明している。

コース整備面では、キャプテンやコース委員会の支援のもとでコース管理人員を補強するなどの取り組み強化を進めています。

霞のメンバーは年間40〜50回来場する人が最も多く、来場したら次の予定を埋めていく。80歳を過ぎた人でも1年先のプレーが生きる目標と約束する。基本的にゴルフが好きならばかりとしており、土肥さんは「いくら体調が悪くとも葬儀とか法事以外は断れない」と嬉しそうに話してくれた。

霞は長き良き伝統を守るためにマナー・ルールの他に、プレーファスト（ハーフ1時間50分以内）の励行などをプレーヤーに求める。夕闇迫るレストラン、19番ホールのカウンターバーはプレーヤーでほぼ満席。最終6時のクラブパスが出るまで霞は盛り上がる。五輪中はそれもお預けになるろうが、良き仲間と楽しめる霞の新たな歴史のページが加わることになろう。